

## 職業性喘息の歴史と代表例

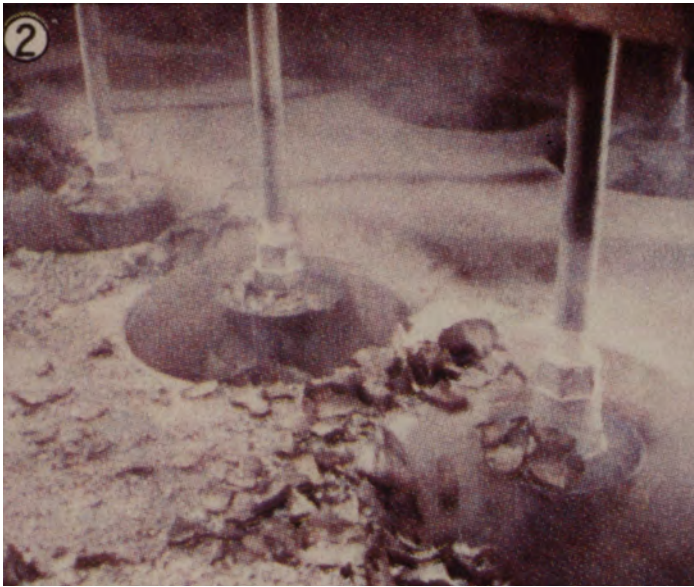
わが国における職業性喘息の最初の症例報告は、1926年、関らにより日本内科学会雑誌に発表された“米杉喘息、建具職人の喘息症状を報告”であった。関東大震災直後の復興で大量の輸入米杉により建具職人に発症したものであった。米杉の輸入中止とともに患者の発生はなくなった。アレルギー学的に職業性喘息をとらえるようになったのは1966年のIgE発見以降であり、最初の例は、1951年に群馬大学第一内科のグループが、群馬県下仁田における詳細な現地調査から舞粉吸入により発症することを確認したコンニャク喘息である。その後、1953年まぶし喘息、1966年ホヤ喘息、1970年ソバ喘息、1985年シイタケ喘息、1989年イソシアネート喘息と多くの職業性喘息が報告された。

**コンニャク喘息**：コンニャク製粉工場従業員や工場付近の住民の間で、コンニャク製造工程で出る舞粉によると思われる気管支喘息の存在が知られていた。コンニャク芋を臼でついて粉末にする際、コンニャクにな

らない主として皮の部分の軽くて細かい粉末（舞粉）を、風を当てて飛ばしてコンニャクとなる精粉を得ていた（①）。この飛散する舞粉を吸入して発症するのがコンニャク喘息であることを七條ら群馬大学第一内科のグループが明らかにした。コンニャク喘息発症率は、実にコンニャク製粉従業者の約16.6%であった。以前、工場内は多量の舞粉が浮遊し、従業員はマスクも着けずに作業したため、患者が多数発生した（②）。さらに、舞粉は工場から屋外に排出され工場周囲へも多量に飛散したため、周辺住民からも患者が多発し、今からみれば環境問題としても重大であった（③）。当時、下仁田地方では、コンニャク製造が基幹産業であり、人口の4割が何らかの形でコンニャク粉生産にかかわっており、転職や移住は困難であったため、舞粉より精製抽出したアレルゲンによる特異的免疫療法が行われ、51.4%が有効以上の成績であった。現在、工場では、関係者の協力により舞粉を外に出さない閉鎖系の装置が導入され、職場でも曝露を回避する対策も十分行われた結果（④）、1980年代になると発症がみられなくなった。



① コンニャク芋からの精粉・製造工程



② 往時のコンニャク製造工場内の様子



③ 工場から屋外に排出されるコンニャクの舞粉



④ 閉鎖系の装置が導入された工場内の様子